

国語**【解答】**

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
e	b	d	b	d
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
a	e	d	c	d
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
a	a	e	b	a
問 16	問 17			
c	d			
問 18	ファーストフードビジネスは食だけでなく、生産、流通、雇用など、社会全体に深く影響を及ぼしているため。			

【学習アドバイス】

本学の入試は、例年、選択科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となるので、各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には50分程度が解答時間となる。2018年までは現代文の大問が2題だったが、2019年以後は現代文の大問1題のみである。課題文の文字数は、2017年大問Ⅰ約3800字+大問Ⅱ5500字→2018年大問Ⅰ約2000字+大問Ⅱ約2500字→2019年約6600字→2020年約4400字→今年度約6000字と毎年かなりの長文である。一方、総設問数は、2017年31問→2018年24問→2019年以後は18問と減少傾向にある。設問数からみて受験生は余裕をもって解答を出すことができただろうが、長文を読み慣れておく必要がある。

設問形式は、5択の選択肢問題が17問、50字以内で解答する記述問題が1問。出題内容は、「漢字・慣用句・対義語の知識を問う問題」が4問、「前後の文脈をもとに空欄に入る語句や文章を選ばせる空所補充問題」が8問、「指示語・傍線部の内容を問う問題」が4問、「筆者の意見を50字以内で要約させる記述問題」が1問、「課題文全体と選択肢との内容一致問題」が1問となっている。この中で、「漢字・慣用句・対義語の知識を問う問題」の4問と「空所補充問題」中の「接続語・慣用表現の知識を問う問題」の2問を合わせて6問（全設問中の3分の1！）が語彙力で決まる問題である。以上の分析をふまえ、以下では3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一に「長文読解対策」である。今年度出題された文章は、鈴木透『食の実験場アメリカ ファーストフード帝国のゆくえ』（中公新書）からのものだ。例年同様、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆（エッセイ）であり、高校生にも読みやすい文章だろう。とはいえ、4000字以上の長文は「一度ざっと読む」だけでも10分近くかかるのではないだろうか。だとすれば、「（記述問題を除いて）1問あたり2分以内で解答する」ペースを目指して準備しておくべきだ。具体的な対策は以下の2つ。①文章全体を二度も三度も読み返す時間的余裕はないので、「本文を読み進むのと並行して各設問に解答していく」方法をとること。②長文を要領よく読みこなすため、「筆者の意見」部分なのか「具体例」部分なのかを意識して欄外にメモしながら読む訓練をすること。練習素材としては、「教科書にのっている文章の出典」あるいは「本学の過去問として出題された文章の出典」を入手し、1章分ずつ「制限時間を10～20分」と決めて上記のチェックをしながら読む訓練を週に2回以上は行うべきだ。この訓練は、大学生になってから膨大な資料の分析をする際にも非常に役立つことを保証する。

第二に「語彙力の増強」である。対策は以下の3つ。①学校の教科書にのっている文章の中で「意味がわからない語句」をチェックし、辞書で調べた意味を自分オリジナルの「語彙ノート」をつくって書き貯めていくこと。「語彙ノート」に「知識」が貯まっていくのを見れば自信もついてくる。②国語便覧や現代文用語集のようなサブテキストの中で「同義語」「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。さらに、上記の「語彙ノート」に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながり一石二鳥だ。③漢字に関しても、本年度は1問しか出題されなかったとはいえ、10問ほど出題された年度もあったので問題集を1冊は仕上げしておきたい。

第三に「文脈把握力」と「論述力」をUPさせることである。本年度全18問中8問は「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内での記述問題は「傍線部前後の文脈から読み取ったヒントを正確な日本語で文章化する力」で決まる設問といえる。対策は以下の2つ。①空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」を意識的に探す練習をすること。②30字～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。①、②を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1～2冊こなすことも必要である。